

Title	一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例 : L・マリの書物から
Sub Title	An example of tradition in practical education in early nineteenth century England : the case of L. Murray's The young man's companion
Author	高橋, 裕一 (Takahashi, Hirokazu)
Publisher	三田史学会
Publication year	2003
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.72, No.1 (2003. 2) ,p.107- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20030200-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例

——L・マリの書物から——

高橋 裕 一

(1)

イングランドも一九世紀にはいると学校教育への関心が高まってくるが、一八七〇年に初等教育の制度化が実現するまでは、例えば一般の庶民にとつて、学校で然るべきカリキュラムに則った教科を習得することはまだ無縁であった。彼らの場合は、教育をごく短期間で済ませ、あるいは実質的にまったく受けぬまま、(ビジネスやプロフェッションを志願する場合はとりわけ) 年季奉公という名の実地訓練の場に早々と送り出されるのが、依然として通常のなコースとなっていた。⁽¹⁾

こうしたなかで、制度、運営、教師、いずれの面でも不備だった学校教育や個人教授を補ったり、独学の途を

選んだ者が頼りにしたのが、例えば、当時の教養を部門別に、あるいは全般的に扱った教習テキスト、自習参考書 (self-help manual, or vade mecum) であろう。⁽²⁾ 教習書の記載にはしばしば、当時の教育の教科構成・課程がある程度反映されてもいる。⁽³⁾ 本稿で筆者は、そのうちの一点、L・マリ著『若者の必携本、すなわち全般的な知識の書』(ロンドンにて、一八二一年刊行)⁽⁴⁾ を取りあげ、この時期、青少年に求められていた知識や教養のへかたち⁽⁵⁾ が具体的にいかなるものであったか、一つの事例として内容を概観したい。またそこから、本教習書はどんな種類の「若者」すなわち読者を想定して書かれた、いかなる性格の文献であるか、少しばかり推測してみようと思う。

(2)

六〇〇頁に近い大冊である本書の具体的テーマを知るには、まず長大なフルタイトルを全訳するのが早道であろう。以下にそれを示せば、『若者の必携本、すなわち英(国)語文法、筆記、速記、算術、会計、簿記、代数学、幾何学、図形計算法、計量術、製図、地理学、年代順に作成された年表、および記憶力の増進術、等からなる全般的な知識の書。一年の月ごとに見た庭仕事の概説。陸海軍関係の事柄の概略。それぞれの項目に、もっとも定評ある書物のリストを付す。(さらに)信仰上の諸教派の解説、そして会話の心得が付いた行儀作法所見。併せて、技巧の諸分野でもっとも役に立つ重要な処方の精選』⁽⁵⁾となる。周知のごとく、当時の文献によく見られる詳細をきわめたタイトルは、当該文献を構成する項目の率直な内訳、概略であるケースが少なくない。本書の場合も、右記のフルタイトルはまさしくその内容構成を巧みに要約していることが、続く広告の文言、⁽⁶⁾目次、⁽⁷⁾および各項目を概ね網羅し、列挙した本文見出しの記載から明らかである。

洋の東西、そして時代を問わず、教育の第一歩はいわ

ゆる「読み書き、算盤」の修得にあった。本書の教程もその例外ではなく、第I部(Part I、以下同様)を英(国)語文法の解説に充て、正書法(発音が類似している綴りや意味が異なる表現の一覧を含む)、比較的詳しい品詞論、統語(構文)法、および関連として語句転換、語句省略、略記法とその用例、韻律やアクセント、音量(長)、語の強勢、文の区切り、音調(声の抑揚)、句読などの諸記号、文頭の大文字や数詞、間違いやすい文法表現の正誤対比、最後に文の読み方、発音上の心得が述べられている。⁽⁸⁾

第II部は「書く」方、つまり筆記について。ここではまずペンの製作法、持ち方から始まって、文字筆写の練習文が並べられ、書簡の形式をその目的や内容ごとに例示したもの、あるいは発信者、受信者によって異なる文例、とりわけ相手の身分・称号や職業ごとに異なる書き出しの標準的な敬称例が掲げられている。⁽⁹⁾

第III部は、「書く」高等技術たる速記。古代エジプトの時代から存在した略字の来歴や、一六世紀頃までにあらゆるヨーロッパ言語にローマ風の文字省略法が定着した事情、などを踏まえたうえで、英(国)語におけるいわゆる速記術とそれが成り立つのに必要な条件、著者の

提唱する速記術の原理・原則が箇条書きで述べられている。⁽¹⁰⁾

以上で「読み書き」の解説が概ね終了し、以後は「算盤」にあたる各分野の詳説に入る。第IV部は、かなり頁を割いた算術の入門編である。数字表、数詞の読み書きにはじまり、加減乗除の基礎が豊富な例題とともに詳述される。著者はその際、例えば加法では、イングランド独自の長さや重さの単位、貨幣の種類および交換比率、常衡と金衡、について説くほか、薬剤や布、ビール（エール）、土地測量、時間など実用的な項目別の数量換算に、単なる足し算以上の紙面を費やしている。算術を実生活に応用できるように配慮したこのような方針は、ポンド、シリング、ペンスを組み合わせる演算の多用からも明らかなく、加法以外の、いな第IV部のほとんど例題に貫かれている。次いで、約分・通分の仕方、外国との様々な通貨交換・為替の早見表と演算法、さらに進んで、当時算術の黄金律とも言われた三の法則（比例算）、逆比例算、複比例算などが商業その他、現場での活用を念頭に解説されている。最後に、分数の計算と約分・通分、および小数の計算を簡略に説明して締めくくるとなる。⁽¹¹⁾

一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例

こうした「算盤」の基礎を説いた後、著者は第V部で、「我々に商業上の取引を、ある法則に基づいた、体系的な仕方では記録することを教える学術（science）の一部門」すなわち簿記を扱っている。まず、単式簿記とその実例（取引日記帳や元帳とともに）、次いで複式簿記の要領が、下書き記録、仕訳帳、元帳のそれぞれについて解説され、詳しい実例が供される。清算ないし決済、転記の仕方についての指針もある。これに、ビジネスマンの様々なケースを設定した受領証や預り証、約束手形の様々なケースを設定した受領証や預り証、約束手形、売渡し証、内国および対外的に（貿易に）流通する為替手形のこと、一覧手形、手形の裏書と引受拒絶、債務証書、など関連事項・用語の実例付きの説明が続く。最後に為替手形と約束手形に関する法令上の定めが簡潔に付録されている。⁽¹²⁾

第VI部はこれもまた「算盤」の範疇である代数の入門に充てられる。主たる数学記号の定義づけの後、加減乗除、分数の演算、累乗を伴う計算、開方、比例計算、各種方程式の解法、その他からなる。⁽¹³⁾

第VII部では「算盤」の応用編、あるいはその延長線上の実用的な学問分野ともいえるべき幾何学、とりわけ図形計算法に入る。次の第VIII部、製図編と合わせると一〇〇

頁近くの紙幅が費やされ、数学的な応用、実地活用の要素を重視している著者の姿勢がうかがわれよう。

まず幾何学の定義、来歴や有用性に触れた後、図形計算法の実用論が展開される。平面と立体の求積法など基礎を踏まえ、例えば家を造る際の職人たちを引き合いに出して、壁に腰板を張る建具屋や板に色をつける塗装工、窓ガラスを据えるガラス屋、その他木挽き、煉瓦職人、タイル職人らの仕事に関連した平面・立体の固有な求積計算をケース別に例題解説している。上記に、三角測量から説かれる土地測量、材木や石材の容積試算、地下貯蔵室のための土堀り、等の用例が続く。円や立体についての応用演算の後、(液体や諸容器ほか) 各種の計量術を論じ、そして平方根と立方根の解法並びに応用を紹介する。大工仕事や航海測量術、尺度法などにかかわる、計器関係の算法例も提示されている。⁽¹⁴⁾

製図編では製図用具、彩色材料の概説の後、透視図法の基本と諸技法が詳説される。応用事例として、著者は風景図画の製作を「この、とても愉快な技巧⁽¹⁵⁾」が当節、非常に流行している」と述べつつ紹介している。

以上に解説された、「読み書き、算盤」の基礎と応用、およびその実用的な関連分野からひとまず転じ、続く第

IX部は地理学の初歩について、である。天文学的に見た地球の形状、そして世界の地勢を、ニュートンの文言などを引きながら概観し、気候上の地帯区分、そして地理学上の諸区分を明確に定義したうえで、国内外の各地の個別的記述に入っている。扱われる地域は、まず外国編ではヨーロッパ(大陸)に続き、アジア、アフリカ、アメリカ、翻って国内編としてイギリスの全領土、それを構成するグレート・ブリトウン、イングランドと周囲の小さな島々、各州の地勢、および都市・バラ・市場町・大きな村落の一覧、ウェイルズ、スコットランドおよびその島嶼部、最後にアイルランド、となっている。この部分の記述は当時、諸外国の概要を知ろうとで初学者に有益な知識を提供したのであろうし、また固有な歴史や制度、地域産業も含めた国内各州の詳しい細目は、一九世紀前期時点での(情報)の在りようを伝える資料と云うに足る。さらに、例えばイングランドやスコットランドなどの各地を区分する際、世俗的な地理上の区分と並んで、大主教区、主教区といった教会管区上の別が相応の紙幅を割いて詳説されている点を、付け加えておく。⁽¹⁶⁾

第X部のテーマは、いわゆる年代学で、当時これは重要な学問であった。その概略的な方法論が述べられた後、

アダムとエヴァの人類創世（紀元前四〇〇四年に設定）から一八一三年という「現代」に至る（現代に近くなるほど子細をきわめているのは現今の年表と同様）詳細な年表が掲げられている。いうまでもなく、現今の歴史学の眼から見れば不正確な年代記述も少なくないが、最良の参考書としてメイヴァの『万国史』第二五巻、年表編が挙げられている点も併せ、当時の世界史認識を知る一個の材料にはなり得るであろう。⁽¹⁷⁾

第XI部ではユニークな記憶術が紹介される。備忘録のつけ方から始まり、グレイ博士の記憶（増進）術に則つて、それを年代学、地理学、天文学、貨幣および度量衡等の領域へと応用した技法を、他の記憶・連想術の諸成果も交えながら、著者は紹介している。⁽¹⁸⁾

最後の第XII部は「雑録 (miscellanies)」と銘打たれ、これまで扱われた以外のテーマを八つの章 (Chapter) に分けて論じたもの。⁽¹⁹⁾ 第一章、ガードウニングすなわち庭仕事では、観賞のための花園、家庭菜園、果樹園に分けてそれぞれ毎月の種蒔き、植樹、栽培や手入れ、収穫などの指針が述べられている。その他、茸の栽培や果樹の病気、害虫駆除法、といった点にも懇切な言及がある。⁽²⁰⁾

第二章、海事・海軍について。船舶の種類や、海軍関

係の階級・役職ないし称号、それぞれの役割。⁽²¹⁾

第三章、兵事・陸軍について。築城術にはじまり、兵法一般、軍紀、階級・役職、その他軍事用語、砲兵・砲術のこと、およびその用語、最後は電信（電報）に及ぶ。⁽²²⁾

第四章は、「雑録」の記述のうち最大の頁数を占める、法律について。まず、自然法からコモン・ロー、成文法、教会法に至る法の分類。実体法の事例では破産法関係と、地主・借地人間の賃貸借契約が中心をなす。次いで、証書一般、懲罰的捺印証書、短期手形ないし約束手形、委任状、遺言状関連、贈与証書、年季契約書、譲渡証書など実用的な法律文書の書式集。最後に、主要な法律・法曹（各種裁判官をはじめとする法曹職に言及）の用語解が添えてある。⁽²³⁾

第五章は、宗教および教派についてだが、概ねキリスト教の概略、教会関係、諸教派を対象とする記述と見てよい。注目すべきは、ユダヤ教とキリスト教の区分の説明と、古代から近代に至るキリスト教の教説や教派の説明で、とりわけ後者は諸教派（セクト）別に、アメリカ合衆国（ダンカー派、シエーカー派から千年王国説の信奉者まで）も含めて地域を問わず、各個、詳細をきわめる。最後は、ジェイムズ一世欽定訳に則り、文献学とし

ての聖書について。⁽²⁴⁾

第VI章、行儀とマナーについて。行儀やマナーの心得二四ヶ条と、会話の心得三四ヶ条からなる。⁽²⁵⁾

第VII章、紋章(学)上の専門語、およびイングランドを中心とする爵位・称号について。前半の、ガーター勲位、あざみ勲位(主にスコットランド)、バース勲位などの解説と、後半の、紋章関係の専門語や爵位・称号の小辞典からなっている。公爵、ジェントルマン、ナイト関連、紋章院とその役職者、などの各項が目を引く。⁽²⁶⁾

最終の第VIII章では、技巧の分野にあって生活に役立つ製造・処方のもろもろが順不同で紹介される。各種インクの製造、羽根ペンの加工・製造、筆記液、筆記紙、ほか文書筆記の技術的な道具論などからはじまり、金メッキの方法、金属の防錆法、黒色に塗る技法、靴の磨きや手入れ、各種ワニスの塗り方と活用法、衣類の防虫や手入れ、簡易な灯光(燐光のマッチや、簡易なガス発火ほか)の熾し方、等々にまで及ぶ。末尾には、度量衡や販売の慣例的単位を掲げた、補遺的な雑記が加えられている。⁽²⁷⁾

巻末に、詳細な索引を付す。⁽²⁸⁾

(3)

以上、いささか粗雑ではあるが、『若者の必携本、すなわち全般的な知識の書』の概要を紹介してきた。

本書はロンドンの出版者トマス・ケリーから一八二一年の上梓以来、一八二四年、二八年、三七年に重版されたが、改訂や増補が加えられた形跡は見られない。価格の表示はなく、全体としてどれくらいの部数が刊行されたか、まったく不明である。著者L・マリについても、氏名の端に添えられたM.A.S.なる肩書⁽²⁹⁾以外、その経歴は詳らかではない。この著者名はことによると仮名かもしれないが、当時のこととて本書自体、少なくとも若干部分は他人の著作を借用した可能性も否定できないであろう。われわれが考察すべきは、細かい記述の信頼性云々より、むしろこの著者がどんな目的で、いかなる読者層に前述のような内容を伝えようとしたか、といった点にある。

著者は巻頭の広告で、知識(knowledge)の有用性、すなわち「この文明開化の時代、すなわち読み書きがもたらす計り知れない恩恵が社会のあらゆる階層に認識されている時、今や普通に若者の教育に取り入れられ、彼

らの時間を占拠している多様な知識・学術 (knowledge and science) の諸分野」の意義を、いわば当然の前提として説く。ほかならぬその通常の「多種多様な知識、学術」が既述の如く本編で展開されるのだが、「本書のもととなった資料素材はもつとも魅力的、かつ興味をそそるやり方で配列してあり、個々の学芸 (science) の原理原則を簡潔、明快に述べたつもりなので、学習者には事前の知識は不要であろう」と著者は自負する⁽³⁰⁾ (以上、傍点はすべて引用者)。

この広告文を素直に読む限り、著者は、当時の漠然たる「学校教育」と併行して差し支えない内容の参考書、あるいは学校へ行かない (行けない) 若者向けの自習書を世に出すべく本書を執筆し、刊行したようにみえる。そしてとりわけ後者、つまり教習テキストとして十分に活用できる「総合教養書」としての意義を強調しているのである。

同時に、右の文言のみならず、すでに紹介した本編の諸項目を追っていくと、オリジナリティーにはいささか乏しいものの、「本書のもととなった資料素材」(各部、章の末尾に参考書目が掲載されている)を一応は尊重し、学問的な体裁を保ちながら、それでいてすぐ役立つ実用

的な観点から構成、解説されていることが明瞭となる。古典語の項目は見当らず、英(国)語文法で奨励されている参考書は当時のベストセラー入門書の一つである⁽³²⁾。算術の参考書のなかでは、数冊を挙げた後、「しかしテイト氏の算術書が現実のビジネス (real business) にもっとも適している」と特記される⁽³³⁾。実用的な単位を用いた算術の解説の後、現実のビジネスとりわけ商業に不可欠な簿記を講じているのも、著者の方針を鮮明に反映しているよう。本書に先立つ数世紀にわたって、若く未経験な商人(ないし商人志願者)の教習を謳った文献がいくつも公刊されてきたが、綴り方のことはさておき、初期の頃から、それらの中心項目は何にも増して算術と簿記だった事情⁽³⁴⁾を、ここで確認しておきたい。

実際に則した幾何学のケース演習、ビジネスマンの日常的な文書作成例、等にも本書は相応の配慮を払っている。法律分野もまた、どちらかといえばビジネスマンやエステイト関係者に役立つ少数の項目に集中して、用例説明が加えてある⁽³⁵⁾。その他の分野に推奨される参考書目も概ね同様で、当代の専門家による本格的な文献よりもむしろ、当時人気を博していた、読みながら実地に活用できそうな手軽な概括・入門書、小辞典の類が多い。恐ら

く本書は「総合教養書」であるとともに、一九世紀初頭のハンド・ブック、いわば実用的な「小百科辞典」たる性格を兼ね備えていたと見るのが妥当なところであろう。

本書によって学習者は「読み書き、算盤」の基礎を十分習得できるのみならず、将来、国内外の商人、様々な職人、製図・測量士、ランド・ステュワードなどへビジネスマンや一部のプロフェッションをめざす若者に対し、著者は最低限の入門知識を授け、彼らの潜在的な要望に応えようとしている。陸海軍、法律、聖職といった分野へ進む条件を整えるには、この程度の記載内容では到底不十分で、それらへの志願者を筆者はあまり念頭に置いてはいまい。しかし本書の該当項目から一部の青少年が、そうした職域への関心や意欲を喚起され、ある程度の参考知識を得ることはできたのではなからうか。

こうした、実業者向けの側面を持つ本書であるが、著者が期待したもう一つの読者層と思われるのが、若きカントリー・ジェントルマン、いわば地方名家の当主となる若者である⁽³⁷⁾。エステイト管理をステュワードやエイジエントに委託することが多かったとはいえ、彼らもエステイト経営を含むカントリー・ビジネスやそれによる実利に無縁ではいらなかった。簡単な読み書き、計算の

みならず、帳簿の基礎、エステイトの図面製作、地誌、等の入門編として、本書が彼らのうちビジネスライクな層の関心を捉えた可能性は否定できない⁽³⁸⁾。さらに第XII部、「雑録」の記述の大多数は実はジェントルマンにこそふさわしい。ガードウニングに通じ、陸海軍に進む者自身内に持ち、賃貸借関連の法律を多少とも諳んじ、品位ある対人マナーに気を配る。紋章や称号はまさしく彼らの世界に属した。もとよりそれらは、ジェントルマン以外の階層の野心に富む若者が、憧れや興味を抱き、知りた」と願った領域でもあろう。

多岐に及ぶ内容を盛り込んだ本書は、教育の不備を補い、独学を支援する「総合教養書」の体裁と内容を保ちながら、同時に、実業やある種の専門職をめざす一般庶民の若者とカントリー・ファミリーの当主たるジェントルマンの若者の、一見すると相容れない両者のいずれをも読者に想定した実用的な「小百科辞典」の性格を兼ね備えていると言えよう。また、ことによると、若者向けを公言しながら、職業や階層にかわりなく幼少期に基礎知識を身に付ける余裕のなかった成人を対象とする、いわば「成人教育 (adult education)⁽³⁹⁾」の指導書の性格さえ、具有していたかもしれない。ただ、そうした多面性

が読者に曖昧な印象を抱かせ、本書全体を不明瞭な、捉えにくい存在にした可能性はあろう。当時よく売れていた英(国)文法の手引書のそれと紛らわしい著者名や、⁽⁴⁰⁾いかにも魅力的なタイトルに惹かれて、本書にどれくらい読者があり、著者の狙いはどれほど実ったのだろうか、残念ながら不詳なので推測するほかない。重版されても改訂や増補の形跡が見られないことから考えれば、実際に広く読まれたかどうか、いささか疑問が残る。ともあれ、われわれは一九世紀前期のイングランドで求められていた当世流の実用的な一般教養の傾向、幅広い知識の在りようを伝えるあくまで一素材として、以上を参考に供したいと思う。

註

(1) 一九世紀の観点からすると、商人、職人のみならず、専門職も概ね「訓練されるべき者」であって、必ずしも「教育された(いわんやジェントルマンの教育を受けた)者」である必要はなく、その訓練の場は実地の年季奉公であった。法律家のような上位の専門職でさえ、そう考えられていた。G. Kitson Clark, *The Making of Victorian England* (London, 1962), pp. 262-4. 彼らのキャリア形成を考える時、学校や書物を通じての教育の意義を過大視すべきではない。

一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例

(2) この類の書物のうち、一七世紀後期からもっとも多く出版され、後世の復刻版も整備されているのは、会計関係のテキスト(ビジネス一般の指導書も含み、しばしば綴り方の手ほどきが併載されている)である。この系統についての研究は古くから盛んで、今なお重要性を失わないD. Murray, *Chapters in the History of Bookkeeping, Accountancy and Commercial Arithmetic* が刊行されたのは一九三〇年のことであった(Glasgow: reprint, 1978, New York)。しかし会計関連のテキストの復刻編集とそれらについての体系的研究に大きく貢献したのは、M. F. Bywater や B. S. Yamey であろう。バイウォーターらにより、ロンドンのスコラー・プレスと東京の雄松堂の刊行で、*Historic Accounting Literature* の壮大なシリーズの公刊が推進された。その全体を俯瞰したガイドブック的な文献として、M. F. Bywater and B. S. Yamey, *Historic Accounting Literature: a companion guide* (London and Tokyo, 1982) がある。また、B. S. Yamey が Introduction を担当した *Historical Accounting Literature* (London, 1975) も、イングランドをはじめヨーロッパ諸国や日本の会計諸分野の重要な古典的著作の目録として有用。こうした文献学的基础のうえに、バイウォーターやヤーマイラを中心にしたこの種のテキストの分析・分類・研究が進められてきたが、本稿の論題ではないので、その詳細は割愛する。ただ、会計関連を重要部門としながら、それ以外の知識・教養を幅広く扱った(後述するように、〈小百科辞典〉風の)教習テキスト、参考書も一八世紀

から一九世紀にかけて数多く刊行されている。例えば本書刊行の後、約二〇年を経て刊行された匿名氏の著作のタイトルを見れば、引き続き本書の系統に属する教習本が流布していた状況の一端が推察されよう。anon., *The Young Man's Best Companion: being a system of education without the aid of a tutor, in which are comprise grammar, writing, arithmetic, algebra, bookkeeping, geometry...* (Edinburgh, 1842). こうした系統については、D. Murray の著作のなかで会計書の分類に付随して適宜触れられ、また少なからず前出 *Historical Accounting Literature* のリストにも見出すことができるが、管見する限りでは、会計分野とは別個にこれらを論じた詳細な研究は見当らず、概括的な分類・整理さえ、なされているとは言い難い。本稿はかかる現状を踏まえ、こうした系統の教養書の存在に注意を喚起しようとした、ささやかな試みである。

- (3) 本稿では教育史分野への詳しい言及は割愛するが、概ね一八世紀前期ごろから、教師自身が綴り方や算術など一般向けのテキストを執筆しており、また教師用の指導書なども数多く出版されている。N. Hans, *New Trends in Education in the Eighteenth Century* (London, 1951), ch. IV-V, pp. 63-116. また、きわめて実用的な分野については、S. ポラード著(山下幸夫・桂 芳男・水原正亨 共訳)『現代企業管理の起源』(千倉書房、一九八二年 [原著は1965年刊]) 第4章、ほかを参照。

- (4) L. Murray, *The Young Man's Best Companion, and Book of General Knowledge; containing English Gram-*

mar, Writing, Short Hand, Arithmetic, Accounts, Book-keeping, Algebra, Geometry, Mensuration, Gauging, Drawing, Geography, Chronology, and Rules for improving memory. General Observations on Gardening, for every month in the year. A Brief Sketch of Naval and Military Affairs. An Account of the Various Religious Sects, with Lists of most approval Books on each subject, Observations on Behaviour and Manners, with Rules for Conversation. Also A Choice Selection of the most useful and important Receipts in the different branches of Art and Science. (London, 1821)

なお本書の刊行年については、筆者の調べた限りでは一八二一年より以前の版が確認できなかったため、ひとまず初版刊行をその年としておく。

- (5) タイトル中に出てくる art and science の当時の意味については、註(36)に概略を記したが、本書の場合には後に見るごとく家庭の技術、生活の知恵といった内容なので、表記のように訳した。また、(11)での receipts は製造処方の意。

- (6) L. Murray, *op. cit.*, iii-iv.
 (7) *ibid.*, v-vii.
 (8) *ibid.*, pp. 1-37.
 (9) *ibid.*, pp. 38-52.
 (10) *ibid.*, pp. 52-61.
 (11) *ibid.*, pp. 62-140.
 (12) *ibid.*, pp. 140-163.
 (13) *ibid.*, pp. 163-186.

(14) *ibid.*, pp. 186-244.

(15) *ibid.*, pp. 244-281.

(16) *ibid.*, pp. 281-362. アイルランドの「もとも文明の遅れた地方」において、多くの住民がカトリック教(popery)であることを示す記述(p. 361)などに、後の第II部、V章の記述の一部と同様、国教徒的偏見が多少感じられるのはやむを得ない仕儀であろう。

なお、アジアにおいて日本への論及はほとんど皆無に近い。文字や書式の発想は異なるけれど、中国語と日本語は同系統に属する書き言葉である、云々の記述のみである(p. 294)。

(17) *ibid.*, pp. 362-389. メイヴァの『万国史』の第二五巻、年表編はWilliam Fordyce Mavor (1758-1837)の著、*Universal History*, ..., 25 vols. (London, 1802-04)の最終、第二五巻のこと。Mavorは、幅広い分野を扱った教育・啓蒙書の編纂者として知られる。速記に関する著作(*Universal Stenography*, ..., 1779)もあり、本書の第III部の参考書目欄で示唆されている(p. 61)。アバディーンシャー生れ、ウッドストックの学校教師、国教会聖職者、法学博士、グラマー・スクール校長、ウッドストック市長など歴任。(D.N.B. vol. XIII, pp. 108, art. William Fordyce Mavor)

またグレイト・ブリトウンに限定した年代学の関係では、同じころ、以下の3巻本が刊行されている。*Annals of Great Britain from the Accession of George III, to the Peace of Amiens*. In 3 vols. (Edinburgh, 1807).

一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例

(18) L. Murray, *op. cit.*, pp. 390-406. 著者が参照している「記憶術を扱ったグレイの代表的な文献は、R. Grey, *Memoria technica* :... (London, 1730) である。Richard Grey (1694-1771) は神学博士。国教会聖職者のかたわらキリスト教・神学関係、ヘブライ語教授などの著作を数多く刊行したが、右記の記憶術の本でもっともよく知られ、同書は生前に数度重版、死後も一八六一年に至るまでリプリント版が出されている。(D. N. B. vol. VIII, pp. 643-4, art. Richard Grey, D.D.)

(19) L. Murray, *op. cit.*, Part XII Miscellanies. pp. 406-568.

(20) *ibid.*, pp. 406-433.

(21) *ibid.*, pp. 434-443.

(22) *ibid.*, pp. 443-457.

(23) *ibid.*, pp. 457-497.

(24) *ibid.*, pp. 497-524.

(25) *ibid.*, pp. 524-537.

(26) *ibid.*, pp. 537-548.

(27) *ibid.*, pp. 549-568.

(28) *ibid.*, pp. 569-574.

(29) Fellow of Academy of Science の略号か。一八世紀の初頭からAcademyと称する私塾が登場してくる。いざれにせよ、この肩書の実態については不詳で、自称の可塑性も大きい。

(30) 以上、広告文に「...」は、Murray, *op. cit.*, iii-ivを参照。

(31) 古典語を一般教育カリキュラムの中でどう扱うか、といった議論は近代以降、各方面でさかんになる。実務教育、すなわち商人ほか、いわゆる「ビジネスマン」向けの養成に関して言えば、古典語不要論が早くから唱えられていた。一八世紀半ば、ロンドンの様々な職業を紹介し、奉公人志願者やその両親向けにそれぞれを詳しく解説したキャンベルの指南書の記述に、フランス語をきわめて重要視する一方で、もはや「死語 (the Dead Language)」と化した古典語の習得に時間を費やすのを批判した指摘がある。R. Campbell, *The London Tradesman...* (London, 1747: reprint, Devon, 1969), pp. 83-4. しかし他方で、古典語の有用性を強調する議論もなお根強かった。こうした、古典語の習得をめぐる教育上の議論 (例えば、前掲 Hans, *op. cit.*, ch. VI, pp. 117-135) はきわめて重要だが、本稿では割愛する。

(32) Lindley Murray, *English Grammar,...* (York, 1795) をもとに、一七九七年初版の *the Exercises and Key* が併載された新版、全二巻の *An English Grammar,...* (York, 1808)、およびその重版を指す。一七九五年本の縮約版 (*An Abridgement of L. Murray's English Grammar,...*) も一七九七年から追加刊行された。親文典、縮約版のいずれも、英米のみならずヨーロッパ諸国、ロシア、インド、日本などで種々の版本 (訳本)、改版が編まれ、各国で大変広く読まれた。なお、宇賀治、正朋氏の解説つきで、英語文献翻刻シリーズ 第一九巻として、両書が合本編集されている (南雲堂、一九七一年)。Lindley Murray

(1745-1826) はアメリカ合衆国生まれで、後にイングランドのヨーク市へ移住した文法学者。右記の最初の文法書 (*English Grammar*) は元来、地元ヨークにあるクエーカー教徒 (彼自身も属するフレンド派) の女学校で国文法のテキストとして委嘱され、書いたもので、たちまち好評を博した。さまざまな欠陥や限界も見出されるが、彼はある時期、「英 (国) 文法の父」と評されたこともある。(前掲書、宇賀治氏の解説、および D. N. B. vol. XIII, pp. 1294-5, art. Lindley Murray 参照)

(33) 既述の William Tate the elder (1781? - 1848) が著した商用算術についての文献を指していると思われる。*A System of Commercial Arithmetic,...* (London, 1809?) または *The Elements of Commercial Calculations,...* (2 vols, London, 1819)。多分、前者の公算が大きい。タイトは商業数学や会計、為替などの著作多数。代表作に、*A Manual of Foreign Exchanges,...* (London, 1831: 第二版以降は *The Modern Cambist,...* 2nd. ed., 1834. として知られる) がある。

(34) 前出、註 (2) に掲げたバイウオーター、ヤーマイ *ら* の *Historic Accounting Literature: a companion guide* の著者別記載や、*Historical Accounting Literature* のヤーマイによる Introduction を参照。なお、T. Watts, *An Essay on the Proper Method for Forming the Man of Business*, 1716. with an introduction by A. H. Cole (Boston, 1946) のコールドによる Introduction は古いが、きわめて有用なサーヴェイである。

(35) 一八世紀以来、算術や簿記関係の自習書に特徴的だったのが、ほかならぬケース演習の多用で、この点でも本書の実用的な性格がうかがわれる。現代的に言えば、「ケースメソッド」的な手法の採用である。すでに一八世紀初期に、例えば数学教師、兼会計士で「アカデミー」経営者のトマス・ワッツがこの手法を強く提唱していた (Watts, *op. cit.*, pp. 28-9) が、その詳細については別稿で論じる予定。

法律分野の参考書として挙げられているのは、Thomas Potts (1778-1842) による、以下の小法典である。T. Potts, *A Compendious Law Dictionary*, ... (London, 1803). ポッツはソリシターで、後年、上級法廷弁護士イン (Serjeants' Inn) にも法律事務所 (chambers) を与えられるようになったと伝えられる法曹家だが、法律だけではなく農事や統計、地誌などの分野にも精通し、著述を残している (D. N. B. vol. XVI, pp. 228-9, art. Thomas Potts)。右の法典も法曹関係者ではなく、主としてカントリー・ジェントルマン、商人、専門職向けに書かれたものである。

(36) 周知の通り、一八世紀から一九世紀にかけての時期は、年代記や百科事典の類が續々と刊行された時代である。比較的大規模な百科事典だけでも、例えば早期の傑作 E. Chambers, *Cyclopaedia* : ... 2 vols. (1728) を皮切りに『*The*』 *Encyclopaedia Britannica* ; ... first ed. 3 vols. (1771) 及び C. F. Partridge, *The British Cyclopaedia of Arts and Sciences* : ... 10 vols. (1835-8) 等々、きわめて

一九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例

多数にのぼる。上記のものを含め、それらのタイトルやサブタイトルに、art(s) and science(s) の語が、あたかもキーワードのごとく多用されていることに注目したい。

ここで言う art と science は、時代や論者によって意味するところが微妙に異なったけれど、多岐にわたる分野 (主として当時の学術や「生活の知恵も含めた」技巧・技術一般に及ぶ) の学芸を漠然と指す広義の表現で、同時にそれらに関する知識・教養、すなわち一般教養全体を包摂する諸教科を意味する (liberal arts and science に近い) こともあった。単に science という場合、ヴィクトリア朝に今日の意味が形成される以前は、いかなる知識体系にもその呼称が用いられていた事実を想起すべきである (S. Mitchell [ed.], *Victorian Britain: An Encyclopedia* (Chicago and London, 1988), p. 694)。マリの筆になる本書のサブタイトルには、註 (5) で指摘したごとく奇妙な文脈ながら、末尾に art and science の語が添えられている。それはこうした当時の教養百科のキーワードとあながち無縁ではないだろう。筆者は本書をこうした教養百科の流れの末端に列する一点としても、捉えたいのである。

併せて、こうした系統の出版物の刊行地として、エディンバラほかスコットランドの重要性が指摘されねばならないが、本稿では立ち入らない。

(37) 彼ら、ジェントルマン向きのマニュアルには古くから事欠かず、(農事・エステイト経営書も含め) 近代以降、数知れず出版されている。例えば一世紀以上前に刊

一一九 (一一九)

行された高名なジョン・ロック著『Some Thoughts concerning Education, 1693 (『教育に関する考察』、服部知文訳、岩波文庫、一九六七年)も、著作の性格はいささか異なるが、ジェントルマンの子弟の教育を念頭に書かれた代表的な一例であろう。

(38) 前出のロックはジェントルマンの子弟にも商業簿記の習得を勧め、チェスターフィールド伯も『息子への手紙』のなかでジェントルマンの条件の一つに、誠実なる tradesman をモデルとする実務家 (a man of business) たることを挙げている。ロック前掲訳書(三二四―六頁)、安川哲夫『ジェントルマンと近代教育——へ学校教育への誕生——』(勁草書房、一九九五年)第四章、一七六一―七頁、をそれぞれ参照。

(39) 成人教育については、さしあたり、Hans, *op. cit.*, ch. VII-VIII, pp. 136-180 を参照。

(40) 著者の筆名が本名、ペンネームのいずれかはさておき、註(32)に紹介した、ほぼ同名の(Lindley) Murray 著の文法書の人気にあやかる意図がなかったかどうか？

(41) 分野を問わず、...is (Best) (or, Pocket) Companion とか、The Complete...とか、...is Instructor といった表題の必携本は近代以降、数限りない。本書ときわめて類似したタイトルの一例に、一世紀近く前に刊行された、George Fisher, *The Instructor, or Young Man's Best Companion*; ... (London, 1727 [確認しうる限り最も古い初版刊行年])、アメリカ合衆国刊行版の *The American Instructor: or Young Man's Best Companion*; ... 又は *The*

Instructor: or American Young Man's Best Companion; ... もある)があり、目次構成、テーマにおいて偶然とは思えぬほど明瞭な類似性が見られる。

本書の著者が構想を立てるにあたって右記のフィッシャー本(一九世紀に入っても長らく版を重ねた)等を参考にしたのはほぼ間違いない。

フィッシャー(恐らくペンネーム。実際の筆者を Ann Fisher Slack [1719-78] と推測する説があるが、異論もあり、はっきりしない)は会計士 (accountant) と称し、他に商業数学関係の書物を刊行、編纂している。フィッシャーの右記文献については、時代的推移を考慮した対比も含め、別稿で詳しく取りあげる(拙稿「18、9世紀イングランドにおけるへ教養への一体系——二つの文献から——」、『松阪大学紀要』第21巻、第1号、2003年3月刊)。

なお本稿は女子の教養・教育については、議論の対象としていないことを蛇足であるが申し添えたい。